

# 19世紀末のジャワのイスラーム教育とプサントレン

こ ばやし やす こ  
小 林 寧 子

はじめに

I イスラーム教育の発展

II コーラン読誦教育

III キターブ教育

おわりに

## はじめに

ジャワの伝統的イスラーム教育機関であるプサントレン(pesantren)は、イスラーム布教の中心のひとつである。プサントレンはジャワがイスラーム化した当初から存在し、現在にいたるまで発展を続けている。ジャワのイスラーム化においてプサントレンは大きな役割を果たしたと言われるが、その歴史についてはまだほとんど解明されていない。

これは資料的困難もさることながら、戦後のインドネシア・イスラーム史研究では、イスラーム同盟(Sarekat Islam)やムハンマディヤー(Muhammadiyah)<sup>(注1)</sup>といったイスラーム改革運動に多くの関心が向けられていたことと深い関係がある。これらの運動の改革的側面が積極的にクローズアップされたのに対し、プサントレンおよびそれを地盤としたナフダトゥル・ウラマ(Nahdlatul Ulama: ウラマーの覚醒。略称 NU)<sup>(注2)</sup>は保守的で近代化への原動力とはなりがたいと考えられたのである。このような理解は最近のプサントレン・NU研究で改められつつあるが<sup>(注3)</sup>、改革運動重視の傾向は今なおひとつの時代認識を強固に維持

している。それは、改革運動の始まった時期をジャワのイスラーム教発展にとって画期的な時代とする一方、それ以前を停滞の時代ととらえていることである。このような歴史観によって、20世紀以前にプサントレンが果たした役割は過小評価されると同時に、プサントレンはあたかも改革運動や民族運動とはほとんど連続性のない存在であるかのように考えられた。しかも、改革運動の影響を受ける前のプサントレン教育は、ヒンドゥー・ジャワ期の残滓を多く内包している<sup>(注4)</sup>と見なされ、真剣に検討されることはなかったのである。

しかしながら、19世紀のオランダ人の手になる文献には、ジャワ人の宗教生活においてプサントレンが重要な位置を占めることはつとに記されている。さらに、19世紀中葉以降、ジャワにはイスラーム「活性化」<sup>(注5)</sup>とも言える徴候が見られることもしばしば指摘されている。つまり、ジャワのイスラーム教から非イスラーム的要素が少なくなり、さらに、宗教儀礼がより熱心に励行されるようになってきたのである。

なかでも、著名なイスラーム研究者であるスヌック・ヒュルフローニエ(C. Snouck Hurgronje、以下スヌックと略)は、ジャワ人の信仰がイスラームの教義から大きくはずれていないことを強調し、プサントレンの教育、アラブ人移住者のジャワ居留、およびメッカ巡礼を、イスラーム発展の要因として重視している<sup>(注6)</sup>。

ここで注意しておきたいのは、アラブ人の移住

とメッカ巡礼は、プサントレンと密接な関連があったということである。まず、アラブ人移住者であるが、19世紀初頭よりジャワ島北海岸の都市にはアラブ人居留区が形成されるようになり、19世紀中葉以降その数は増加した。このアラブ人の大半はアラビア半島南部のハドラマウト (Hadramaut) 出身の厳格なイスラーム教徒であった。彼らは商業活動のほか、布教のためのモスク建設や教育にも従事していた<sup>(注7)</sup>。次に、ジャワからのメッカ巡礼者も、植民地政庁の規制の大幅緩和 (1852年)<sup>(注8)</sup>とスエズ運河開通 (67年) で飛躍的に増加した。巡礼者のなかにはメッカに長期滞在し、イスラーム教の知識修得に専念する者も少なくなかった<sup>(注9)</sup>。このようなアラブ人移住者とジャワ人のメッカ留学経験者が伝える中東のイスラーム学によって、プサントレンはインセンティブを受けていたのである。

こうしたジャワにおけるイスラーム発展史の異なる見方を裏づけるひとつの試みとして、本稿では改革運動が胎動を始める以前の19世紀末期のプサントレンをとり挙げ、その教育内容を明らかにするとともに、この分析過程を通じて、上述のイスラーム「活性化」とプサントレン教育との関連についても検証したい。

執筆にあたって用いた主な資料は、1887年にプサントレンのグル (guru: 宗教教師) に関して行なわれたオランダ植民地政府の調査記録 (記載は登録形式でなされているので、以下、便宜的に『グル登録簿』と呼ぶ) である。これは、マディウン (Madiun) 州、デマツ (Demak) 県 (スマラン [Semarang] 州)、クディリ (Kediri) 州の部分しか発見できなかった<sup>(注10)</sup>。しかし、当時のジャワのプサントレンでは教育内容にはほとんど地域差がなかった<sup>(注11)</sup>ことから、ジャワ全体のプサントレン教育を論ずるには十分

有用であると思われる。

『グル登録簿』には、面接調査で各グルに対してなされた次の7項目の質問に対する解答がムラユ (Melayu) 語で記されている<sup>(注12)</sup>。

- (1) そのグルは以前どこで学んだのか。
- (2) 生徒は何人で、それぞれどこ出身か。
- (3) 新入生はどの本から習い始めるのか、またそれはジャワ語か、それともジャワ語の説明付きのアラビア語か。
- (4) その生徒は、イスラーム法学を学ぶ前にアラビア語の語形論と統語論を先に習うのか否か。
- (5) 生徒はどの高等学習の本まで理解できるのか (書名と著者名を記せ)。
- (6) その本はアラビア語で書かれているのか、もしくはムラユ語か。
- (7) その本はどこで購入できるのか、またそれぞれの値段はいくらか。

本稿では、教育に関する(3)~(7)の部分を重点的に検討した<sup>(注13)</sup>。このほか、『グル登録簿』を補完するために、同時代のオランダ人の手になるジャワ・イスラームに関する刊行文献を参照した。

なお、イスラーム関係用語の表記は、インドネシア語・ジャワ語慣用を除いて、日本イスラム協会監修『イスラム事典』(平凡社 1982年)に従った。

(注1) イスラム同盟は1911年中部ジャワのスラカルタで結成されたインドネシアで最初の大衆的民族運動団体。ムハンマディヤーは1912年同じく中部ジャワのジョクジャカルタで結成され、特に教育・社会活動において目覚ましい成果をあげた。

(注2) ムハンマディヤーの動きに対抗して、1926年東部ジャワのスラバヤでプサントレンの主宰者を中心に結成された社会・宗教団体。

(注3) 最近のプサントレン・NU研究の動向に関しては次を参照。拙稿「『書評』*Zamakhshari Dho-*

fer: Tradisi Pesantren; Studi tentang Pandangan Hidup Kyai/Karel A. Steenbrink: *Pesantren, Madrasah, Sekolah; Pendidikan Islam dalam Kurun Moderen*」(『アジア・アフリカ言語文化研究』[東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所]第34号 1987年) 187~194ページ。

(注4) Benda, Harry J., "South-East Asian Islam in the Twentieth Century," P.M. Holt 他編, *The Cambridge History of Islam*, 第2巻, ケンブリッジ, Cambridge University Press, 1970年, 194~195ページ/Deliar Noer, *Gerakan Moderene Islam di Indonesia 1900-1942* [インドネシアにおける近代イスラーム運動1900-42年], ジャカルタ, LP 3 ES, 1980年, 11~24ページ(英語版は *The Modernist Muslim Movement in 1900-1942*, ロンドン, Oxford University Press, 1973年)。なお, サルトノ・カルトディルジョ(Sartono Kartodirdjo)は19世紀のプサントレンに関心に向けた数少ない研究者のひとりであるが, プサントレンをイスラーム教育の場というより農民運動の拠点としてとらえすぎている。Sartono Kartodirdjo, *The Peasants' Revolt of Banten in 1888*, ハーグ, Martinus Nijhoff, 1966年/同, *Protest Movements in Rural Java*, クアラルンプール, Oxford University Press, 1973年。

(注5) 正確には, これはオランダ語では"reveil"(復興)という言葉で表現されている。しかし, 「復興」には過去に衰えたものが再び盛んになるという意味合いが大きく, イスラーム化進行の現象を指すのには適切でないため, 筆者はあえて「活性化」を用いた。

(注6) Snouck Hurgronje, C., "Prof. de Louter over 'Godsdienstige Wetten, Volksinstellingen en Gebruiken'," *De Indische Gids*, 第5巻第2号, 1883年, 98~108ページ/同, *Verspreide Geschiedenissen*, 第4巻第1号, ハーグ, Martinus Nijhoff, 1924年, 11~26ページ。

(注7) Roff, William R., "South-east Asian Islam in the Nineteenth Century," Holt 他編, 前掲書所収, 170ページ/Steenbrink, Karel A., *Beberapa Aspek tentang Islam di Indonesia Abad ke-19* [19世紀インドネシアにおけるイスラームの諸側面], ジャカルタ, Bulan Bintang, 1984年, 128~138ページ。

(注8) 19世紀前半, メッカ巡礼者が狂信的なイスラーム教徒になるのを恐れたオランダ政府は, 巡礼希

望者にきわめて高額(110ギルダー)の旅券所持を義務づけた。しかし, 政府決定1852年5月3日第9号により, この旅券は無料となった。

(注9) 19世紀後半のメッカには, このようなマレー, インドネシア方面からの巡礼者の居留地があった。Snouck Hurgronje, C. 著, J.H. Monahan 訳, *Mekka in the Latter Part of the 19th Century* (復刻版, 以下 *Mekka* と略), レイデン, Brill, 1970年。

(注10) マディウン州とデマツ果の部分はオランダの王立言語・地理・民俗研究所のホバー(E. Gobée), コレクションのなかに収められている(整理番号はマディウン州の部分がH 1085-89, デマツ果がH 1085-90)。クディリ州の部分は, レイデン大学図書館 東洋手書(Oostersche Handschriften)室のスツック・ヒュルフローニエ・コレクションのなかにある(整理番号は7710)。調査対象となったグルは, マディウン州が185人, デマツ果95人, クディリ州6人である。恐らくこの資料は, 1882年各州理事官に指示された宗教教師, 墓地および免税村(聖墓・王族の廟墓の管理, またはプサントレンの運営等を条件に免税権を認められた村)に関する調査が行なわれたときの調査記録の一部であろう。植民地政府の主たる関心は免税村首長の権限の規制にあり, 宗教的側面にはあまり関心が払われなかった。そのために記録が散逸したのかは定かでないが, 他の地域の記録の所在に関しては今後の資料リサーチを待たなければならない。

(注11) そればかりでなく, ジャワのイスラーム教育で使用されていた教材は, 西スマトラのそれともほとんど同じであった Snouck Hurgronje, C., *Een en Ander over het Inlandsch Onderwijs in Padangsche Bovenlanden* (以下, *Padangsche Bovenlanden* と略), ハーグ, Martinus Nijhoff, 1888年。

(注12) 当然, "guru"は"goeroe"と表記する旧綴りが用いられているが, 本稿においてはすべて新綴りに直した。

(注13) 調査担当官は各地で異なるため, 記載方法, 表記には若干統一が欠けている。また, 必ずしも質問に対応する解答が記されているわけでもない。以上を考慮し, 学習順序と教授法に関しては主に(3), (4)の解答, 教材については(3)~(7)の解答すべてを検討した。

## I イスラーム教育の発展

まず、19世紀末期のイスラーム教育は大きく2段階に分けられることを述べておかねばならない。イスラーム教育はコーラン読誦教育から始まる。このコーラン読誦教育を主体とする初等教育の場はふつうランガル (langgar) であった。ランガルは村や都市のカンポン (kampung: 集落, 住宅密集地域) に必ずひとつはある礼拝所である。ここで教えるグルは、グル・ンガジ (guru ngaji: コーラン読誦師) と呼ばれ、ふつうモデイン (modin: モスク管理人) やクティブ (ketib: 説教師) などの下級宗務官吏であることが多かった。また、裕福なジャワ人がランガルを私設し、それをグルに提供することもあった。ランガルに限らず、グルはモスクや自宅の軒先でも教えた。

コーラン読誦教育を修了し、さらに宗教知識を深めるためにキターブ (kitab: イスラーム教に関するアラビア語の原書) を学ぶ者が行くところがプサントレンであった。プサントレンでコーラン読誦教育が行なわれることもあったが、キターブ教育の方に重点が置かれていた。後述するように、キターブの種類やレベルはさまざまで、初級程度のキターブを教えるところはプサントレンの名に値しないという見方もある。プサントレンのグルはふつうキヤイ (kyai: イスラーム導師) の尊称で呼ばれることが多かった。コーラン読誦教育が通常自宅近くで行なわれるのに対し、キターブ教育のために遠方のプサントレンへ行く者は多かった。プサントレンにはこのようなサントリ (santri: 生徒)<sup>(注1)</sup> のためのポンドック (pondok: 宿舎) があり、大きなプサントレンはひとつのカンポンを形成することもあった。

このランガルやプサントレンのようなイスラーム教育機関がいつごろからジャワに一般化したのかは定かでない。ジャワ民衆のイスラーム教育の実態が少しずつ明らかになるのは、19世紀に入ってからオランダが植民地経営のために植民地住民の教育に目を向け始めてからのことである。それ以前に関しては、わずかにジャワ文学からプサントレンの一端を知ることができるのみである。しかし、そのなかにも19世紀のプサントレンを考えるうえで欠かせない問題を見い出すことができる。それはタサウフ (tasawwuf: イスラーム神秘主義) とシャリーア (shari'a: 正統的イスラーム法) の問題である。

ジャワのイスラーム化において大きな影響力を持ったのはタレカット (tarekat: 神秘主義者教団。アラビア語の“tarīqah” [道]) であった<sup>(注2)</sup>。タレカットは断食やジクル (dhikr, 連禱, 「アッラーのほかに神はなし」などと唱えて神を讃美すること) などの宗教的体験を重視し<sup>(注3)</sup>、しばしば知的認識を軽視する傾向を持っていた。タレカットでは指導者となるグルへの絶対的忠誠が要求され、このような教えはジャワの聖者崇拜と結びつき、民衆の信仰を獲得した。もちろん、プサントレンもその影響下にあり、そこではヒンドゥー・ジャワ的要素の融合した独特の神秘主義が教えられた。しかし、その一方で、ジャワにはイスラーム法を重視する潮流もあり、古くからタレカットと対立していた<sup>(注4)</sup>。この対立はサントリの思想を描いた19世紀初頭のジャワ文学でもまだ重要なモチーフとなっており<sup>(注5)</sup>。

この問題に留意し、以下オランダ側がジャワ人のイスラーム教育の実態をどのように把握していたのかを概観し、そのなかでイスラーム教育の発展を考察してみたい。

19世紀の前半、オランダは2回(1819年と31年)ジャワ人の教育調査を行なったが、この2回の調査報告の内容に大差はない。それによると、教育の内容はアラビア語の読み書き、およびコーランを読む程度のものであり、ごく初級程度のキターブも使用されていた。ランガルやプサントレンがすでに各地に相当数存在し(ただし、このふたつはまだ区別されていない)、階層にかかわらずこの種の教育を受けることができた(注<sup>6</sup>)。イスラーム教育がすでにジャワ人一般の間で定着していたのは明らかである。

オランダの教育調査の目的は、植民地経営効率化のための識字率拡大の可能性を探ることであった。しかし、イスラーム教育は特殊宗教的であり、そこではジャワ語の読み書きは教えられなかったため、その後は関心が向けられなかった。そのかわりに、オランダは、1851年を皮切りに、イスラーム教育と異質な西洋教育をジャワに導入し始めた。これは現地人官吏養成を目的としたもので、その数はかなり限られていた。西洋教育が大幅に拡大されたのは20世紀に入ってからであり、それ以前は西洋教育の存在は一般のイスラーム教育にとっては何の脅威ともならなかった。しかし、その約半世紀の間に、植民地官僚化したプリアヤイ(priyai: 宮廷官吏、貴族)は次第に西洋教育志向を強め、一部にはイスラーム教離れも始まった。反面、イスラーム教育は民衆教育的性格を強めていったとも言えるであろう。

西洋教育を導入した当時、オランダ側はイスラーム教育の内容に関してはまだ十分な知識を持ち合わせておらず、イスラーム教育に対して非常に低い評価をしている(注<sup>7</sup>)。しかし、他方では、漠然とではあれ、ランガルとプサントレンを識別するようになり(注<sup>8</sup>)、わずかながらも理解が進んで

いることを窺わせる。また、グルのなかにハジ(haji: メッカを巡礼した人)がいること、ハジであるグルには他のグルよりも多く生徒が集まることも認められている(注<sup>9</sup>)。さらに、神秘主義者の集団勤行が減少する一方、「正統な」イスラーム信仰が広がりつつあることも観察されている(注<sup>10</sup>)。ジャワのイスラーム教は変容の徴候を見せ始めたのである。

1880年代に入ると、その変化はよりはっきりとあらわれた。たとえば、プロテスタント牧師として1861年から90年までジャワに滞在したプンセン(C. Poensen)は、ジャワ人の宗教生活について多くを書き記したなかで、教育を受けた者やメッカ巡礼経験者の間では、アッラーの神と土着の多神教を合体させることは少なくなり始めていることを指摘している(注<sup>11</sup>)。さらに、プンセンはそのようなプサントレンで学んだ者やハジの影響力の大きさを強調し(注<sup>12</sup>)、それを裏づけるように、プサントレン周辺の住民は、大多数のジャワ人と異なり、細かい戒律にまで注意を払って生活していることを指摘している(注<sup>13</sup>)。また、ジャワ帰りの植民地官僚から多くの情報を得たフェット(P. J. Veth)も、アーシェーラー(‘āshūrā’: ヒジェラ暦1月第10日目の断食潔斎)の行事が以前よりも簡素化されてきたことに言及し、宗教知識の増加とアラブ人の影響でジャワ人の宗教儀礼から非イスラーム的要素が消え失せつつあると主張している(注<sup>14</sup>)。

加えて、プサントレンを実地踏査したファン・デン・ベルフ(L. W. C. van den Berg、以下、ベルフと略)やスヌックにより、大多数のプサントレンでは純然たるイスラーム教の知識修得が教育の中心であることが明らかにされてきた。ベルフは、1885年にジャワ各地のプサントレンを訪問し、そこで使用されているキターブを49冊列挙し

たが、そのなかで神秘主義のキターブはわずか6冊にすぎなかった(注15)。また、スヌックは、プサントレン教育での主要科目はフィクフ (fiqh: イスラーム法学) とタウヒード (taḥhid: イスラーム神学) であると述べている(注16)。神秘主義はすでに重要な位置を占めてはいなかった。

変化したのは教育内容だけではない。スヌックは、プサントレンがかつてない勢いで増加していることも指摘している(注17)。オランダ植民省発行の『植民地報告』(Koloniaal Verslag) には、ランガルとプサントレンを一括して「イスラーム教徒の宗教学校」(Mohammedaansche godsdienstschool) として扱ったイスラーム教育統計が1882年から93年の分まで掲載されている。第1表に示したように、「宗教学校」とその生徒の数は、1890年代に入ってやや減少するものの、80年代の間に約2倍近くに増えている。ただし、年による数字の変動には各統計担当官の判断規準の不統一が如実にあらわれていることもあるので、ここに表われた数字を額面どおり受け取るわけにはいかない。たとえば、『グル登録簿』が作成された1887年の各地のイスラーム教育統計は第2表のとおりである

第1表 ジャワ・マドゥラのイスラーム教育統計

年	イスラーム教徒 の宗教学校数	生徒数
1882*	10,488	161,839
1883*	12,947	164,953
1884	14,929	222,663
1885	16,760	255,148
1886	17,388	231,871
1887	18,608	291,721
1888	19,896	293,466
1889	23,021	304,283
1890*	17,879	259,166
1891*	18,285	281,119
1892	18,202	264,216
1893	18,030	272,427

(出所) Koloniaal Verslag, ハーグ, Algemeene Landsdrukkerij, 1883~94年より作成。

(注) \* 一部の地域の報告が欠落している。

第2表 1887年イスラーム教育統計

行政区画	イスラーム教徒 の宗教学校数	生徒数
バンタム(Bantam)州	870 <sup>1)</sup>	15,865
バタヴィア(Batavia)州	1,444	15,941
クラワン(Krawang)州	242	1,677
ブリアンゲル(Preanger)諸県	1,403	32,280
チェリボン(Cheribon)州	798	10,667
テガル(Tagal)州	987	15,324
ペカロンガン(Pekalongan)州	496	7,813
スマラン(Samarang)州	1,633	23,308
ジェバラ(Japara)州	605	14,902
レンバン(Rembang)州	496	13,502
スラバヤ(Soerabaija)州	2,198	26,946
パサルアン(Paseroean)州	323	8,094
プロボリンゴ(Probolinggo)州	1,445	9,800
ブスキ(Bezoeki)州	1,208	19,287
バニュマス(Banjoemas)州	134	2,481
バグラン(Bagelan)州	275	5,885
クドゥ(Kadoe)州	148	1,575
ジョクジャカルタ (Djokjokarta)王侯領 <sup>2)</sup>		
スラカルタ(Soerakarta)王侯領	295	3,564
マディウン(Madioen)州	417	7,540
クディリ(Kediri)州	979	13,307
マドゥラ(Madura)州	2,212	42,413
全ジャワ・マドゥラ	18,608	291,721

(出所) 第1表と同じ(1888年, 127ページ)。

(注) 1) このうち710校は初等教育, 160校はより上級の宗教教育を行なう。

2) ジョクジャカルタには特定の宗教学校は存在しない。

が、これもちょうど幅をもたせて見る方が無難である(注18)。しかし、非イスラーム地域でイスラーム化が急速に進行しているという植民地官吏の報告もあり(注19)、イスラーム教育が量的拡大を見せたのはまちがいない。

この「宗教学校」のうち、プサントレンがどれくらいあるのかを判断するのは難しい。ベルフは、1884年の数字をとりあげ、ジャワ・マドゥラの「宗教学校」約1万5000のうち、5分の4は特に年少者を対象とした教育の場であり、残り5分の1がイスラーム教の基本原則を教えるところであると概算している。さらにそのなかでもプサントレンと呼べるような上級者用の教育機関は200~300にすぎないと見ている(注20)。また、19世紀末に各地のイスラーム教育を実地踏査したレッケルケルケル

(C. Lekkerkerker)も300という数字は過大評価であると判断している(注21)。いずれにしろ、ランガルと比較すると、かなり数が限られていたようである(注22)。

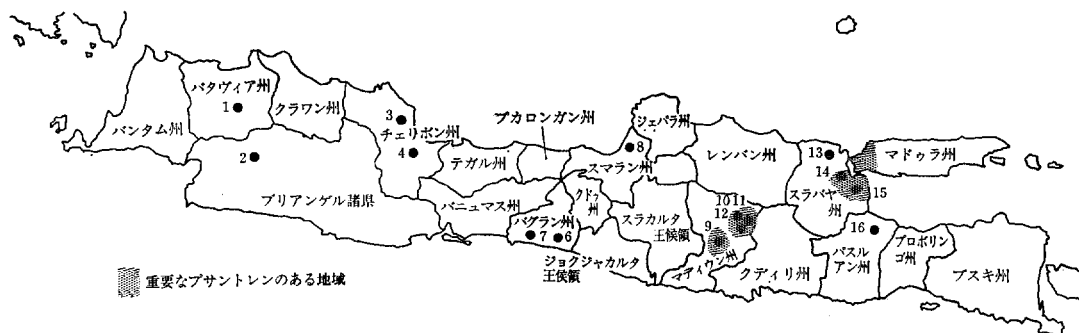
また、統計数字からはわからないが、プサントレンの教育水準には地域差もあった。オランダの文献に見い出される19世紀末期のジャワで有名であったプサントレンの所在と重要なプサントレンがあったとされる地域の位置を示すと第1図のようになる。まず、東部ジャワのスラバヤ州(なかでもシダルジョ県)とマドゥラ島西部であるが、ここはジャワでもはやくからイスラーム化し、イスラーム教育の歴史の古い地域であった。しかも、アラブ人居留区もあり、アラブ人グルも多かった。興味深いのは、北海岸よりもかなり遅れてイスラーム化し、しかもアラブ人居留区もないマデ

イウン州の内陸部に有名なプサントレンが集中していたことである。これはマタラム(Mataram)王家に保護されてプサントレンが発展した特殊な地域であった(注23)。図に示されたようなプサントレンにはジャワ各地からサントリが集まり、ジャワのサントリの交流の場となった。

しかし、この地域差もすでに際立ったものではなくなりつつあった。20世紀に入ると上述のような地域的条件にとらわれずにプサントレンは発展し、プサントレンの地図も大きく塗りかえられた(注24)。

以上見たように、19世紀末期のジャワのプサントレンは大きな変容を経てひとつの隆盛期を迎えようとしていた。そこで次に、プサントレンで行なわれたイスラーム教育の内容を具体的に見ていきたい。

第1図 19世紀末のジャワの主要なプサントレン



- 1——：バイテングルフ (Buitenzorg) 県ジャシニング (Jasinga) 郡。2 ボニカシュ (Bonikash)：チアンジュール (Tjiandjoer) 県。3 ウォノロト (Wanarata)：チェリボン県マンディランチャン (Mandirantjan) 郡。4 ムンジュル (Moondjoel)：チェリボン県ベベル (Beber) 郡。5 ドヨルフル (Daya Loehoer)：テガル州。6 ロニン (Loning)：クトアルジョ (Koetoardjo) 県ピトルー (Pitoeroeh) 郡。7 ブランカル (Brangkal)：ゴンバン (Gombang) 県カラングンニャール (Karanganjar) 郡。8 カデイラング (Kadilangoe)：デマツ県デマツ郡。9 テガルサリ (Tegalsari)：ポノロゴ (Ponorogo) 県クトゥ (Koetoe) 郡。10 クボンサリ (Kebonsari)：マディウン県ウテラン (Oeteran) 郡。11 バンジャルサリ (Banjarsari)：マディウン県ウテラン郡。12 ヌゴタル (Ngotal)：マディウン県。13 ドラジャット (Drajat)：シダユ (Sidayoe) 県。14 シドチュルモ (Sidacerma)：スラバヤ市近郊。15 ダセルモ (Daserma)：シダルジョ (Sidoardjo) 県。16——：パスルアン県クボンサリ (Kebonsari) 郡。

(出所) Berg, L. W. C. van der, "Het Mohammedaansche Godsdienstonderwijs op Java en Madoera en de Daarbijgebruikte Arabische Boeken," *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 第31号, 1886年, 520~521ページ/Lekkerkerker, C., "De Pesantren," *Het Onderwijs*, 第8巻第43号, 1889年, 508ページ。

(注1) このほか、サントリは「敬虔なイスラーム教徒」も意味する。

(注2) Johns, Anthony, "Sufism as a Category in Indonesian Literature and History," *Journal of Southeast Asian History*, 第2巻第2号, 1961年, 10~23ページ。

(注3) Bruinessen, Martin van, "De Tarekat in Indonesië: tussen Rebelle en Aanpassing," C. van Dijk 編, *Islam en Politiek in Indonesië*, マイデルベルフ, Dick Countinho, 1988年, 69~73ページ。特にシクルは重要で, 流派によって唱え方は異なるが, 集団で行なわれることが多かった。このようなシクルは長時間に及ぶこともあり, 陶酔状態に陥る者もあった。

(注4) Pigeaud, Th., *Literature of Java*, 第1巻, ハーグ, Martinus Nijhoff, 1967年, 76~79ページ/S. Soebardi, "Islam di Indonesia" [インドネシアにおけるイスラーム], *Prisma*, 特別号, 1978年, 65~68ページ。

(注5) S. Soebardi, "Santri-religious Elements as Reflected in the Book of *Tjentini*," *Bijdragen tot de Taal-, Landen Volkenkunde*, 第127号, 1971年, 331~349ページ。

(注6) Chijs, J. A. van der, "Bijdragen tot de Geschiedenis van het Inlandsch Onderwijs in Nederlandsch-Indië, aan Officiële Bronnen Ontleend," *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* (以下, *T. B. G.* と略), 第14号, 1864年, 215~219, 228~234ページ。

(注7) J. L. V. (筆者名不詳), "Bijdragen tot de Kennis der Residentie Madioen, III. Priesters en Priesterscholen," *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië*, 第17巻第2号, 1855年, 16ページ/Brumund, J. F. G., *Het Volksonderwijs onder de Javanen*, バタヴィア, 1857年, Tot Nut van 't Algemeen in Oost-Indië, 1~28ページ。

(注8) Brumund, 同上書。

(注9) J. L. V., 前掲論文, 14ページ/同上書 7ページ。

(注10) J. L. V., 同上論文, 14~15ページ。

(注11) Poensen, C. (前書き P. J. Veth), *Brieven over den Islām uit de Binnenlanden van Java*, レイデン, Brill, 1886年, 146ページ。

(注12) 同上書 4~5, 102ページ。

(注13) 同上書 54ページ。

(注14) Veth, P. J., [De 'Āsjoeradag] *Internationales Archiv für Ethnographie*, 第1号, 1888年, 230~233ページ。

(注15) Berg, L. W. C. van der, "Het Mohammedaansche Godsdienstonderwijs op Java en Madoera en de Daarbijgebruikte Arabische Boeken," *T. B. G.*, 第31号, 1886年, 518~555ページ。

(注16) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 181~184ページ。

(注17) 同上書 102ページ。

(注18) 各年の数字の変動は, 州によっては数倍や数十倍という幅の増減になったりする。これは担当官によってはプサントレン程度の大きな教育機関しか教えなかったり, あるいは大小にかかわらずすべてを考慮に入れたりしたその差であると考えられる。また, ジョクジャカルタには「宗教学校」はないと報告されているのもこの類の判断の相違によるものであろう。

(注19) Chappele, H. M. la, "Nota betreffende het Tenggergebied," *T. B. G.*, 第41号, 1899年, 32~54ページ。ここで報告されているのは, プロボリンゴ州のテンゲル地域のことである。

(注20) Berg, 前掲論文, 518~520ページ。

(注21) Lekkerkerker, C., "De Pesantren," *Het Onderwijs*, 第8巻第43号, 1889年, 508ページ。

(注22) どの程度のレベルのものをプサントレンとするかの判断はまちまちで, 『グル登録簿』を検討すると, 各地の担当官によるプサントレン抽出の規準の差は歴然としている。マディウン州では, ランガルのグル・ンガジの範疇に属するコーランしか教えないグルが40人も含まれている。デマツ県とクディリ州にはそのようなグルは見当たらない。しかも, クディリ州では比較的生徒を多く集める上級のキターブを教えるグルだけを抽出しており, このためわずか6人しか面接調査されなかったものと思われる。

(注23) マディウン州のなかでも9. テガルサリと11. バンジャルサリはプサントレンのある免税村(「はじめに」の(注9)を参照)として有名であった。ここではプサントレンを主宰するキヤイが首長であり, そのキヤイはプサントレンを運営・管理するために, 住民の労働力を徴用したり, 収穫物を供出させる権限を有した。

(注24) Snouck Hurgronje, C., *Verspreide Geschriften*, 第4巻第2号, ハーグ, Martinus Ni-



jhoff, 1924年, 378~379ページ。なお, 20世紀の有名なプサントレンの所在地に関しては次を参照。Zamakhsyari Dhofier, *Tradisi Pesantren* [プサントレンの伝統], ジャカルタ, LP 3 ES, 1982年, 3ページ。

## II コーラン読誦教育

サントリがプサントレンで何を最初に学ぶのかについて、『グル登録簿』では、「(生徒にはまず——引用者) コーランをアラビア語で教えることから始める」といった類の答が目立った。プサントレンに入るサントリは通常コーラン読誦教育を修了しているが, まだこれを済ませていない者はこれから始めなければならなかった。すなわち, プサントレンの教育は, もっとも主要なキターブ教育のほかに, それに先立ってコーラン読誦教育を含んでいる場合が多かったのである(註1)。

コーラン読誦教育はイスラーム教育の基礎となる部分であり, 大多数のジャワ人は女子であれ男子であれ, 「もっとも世俗的なプリヤイの子弟から最も遅れた貧しい村人の息子まで」(註2) 多少なりともコーラン読誦教育を経験した。ジャワ人の宗教生活を考えるうえで, コーラン読誦教育は不可欠の要素であると言えるであろう。以下, ここではランガルのコーラン読誦教育も含めて論ずることにする。

アラビア語の原書であるにもかかわらず, コーランはこの時代にはかなりジャワに普及していたようである。また, キターブの入手にもそれほど困難はなかったようである。『グル登録簿』によると, コーランやキターブはスラバヤ, スマラン, バタヴィアのアラブ人書店で購入することができ, シンガポールへの注文も可能であった(註3)。「行商の人から買う」という証言もあり, 巡回商人の

存在も明らかである。さらに, 自前の石版で印刷するグルも1例ながら見られた。新しく出回り始めた印刷本のほかに従来からの手書本もまだ多かったが, 値段も高く誤写もあることから, 印刷本が手書本を圧倒しつつあった(註4)。コーランは部分的に購入することも可能であったし(註5), ランガルには寄贈本もあり(註6), 一般民衆にとっても身近に手に取れる存在であったと考えられる。

コーラン読誦の学習方法については『グル登録簿』からは詳しいことがわからないので, スヌック等の文献に依拠しつつ, その実態を見てみよう。

コーラン読誦教育はまずアラビア文字に親しむことから始まった。このアラビア文字の読み書きの練習はアリップ・アリッパン(alip-alipan)と呼ばれた。アリップはアラビア文字の最初のアルフアベット, 1(アリフ)のことである。小さな板に書きながらアラビア文字28字を覚えた。この時, アラビア語を読む最初の教材に使われるのがコーラン開扉のスーラ(ṣūrah: 章), 「ファーティハ」(Fatīḥah)であった。「ファーティハ」はコーランのエッセンスであり, 1日5回の礼拝で毎回2度以上繰り返される重要な部分である。ここにその全文を掲げてみたい。

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において  
讃えあれ, アッラー, <sup>よろず</sup>万<sup>よ</sup>世の主,

慈悲ふかく慈愛あまねき御神,

審きの日の主宰者。

汝をこそ我らはあがめまつる, 汝にこそ救いを  
求めまつる。

願わくば我らを導いて正しき道を辿らしめ給  
へ,

汝の御怒りを蒙る人々や, 踏みまよう人々の道  
ではなく,

汝の嘉し給う人々の道を歩ましめ給え。

（『コーラン』井筒俊彦訳 岩波文庫  
1986年 11ページ）

この「ファーティハ」をつづり、発音し、暗誦できるようになるまで繰り返し読誦した。読誦する場合、グルのあとに続けて少しずつラグ（lagu: メロディー）をつけて朗誦する練習もした。これには発音の正確さが特に要求され、発音をまちがえて読むことは罪惡とされた。

次に使われる教材はトゥルタン（Turutan）と呼ばれ、「ファーティハ」と同じ方法で学習された。トゥルタンはコーランの最終 Juz'（juz: 巻）「アンマ」（'Amma, 第78章から第114章まで）を第114章から逆に並べたものである（注7）。「アンマ」にある章は比較的短いものが多くて学びやすい。そのなかには、日々の礼拝でよく任意に朗誦される「黎明」（第113章）、「信仰ただひと筋」（第112章）、「無信仰者」（第109章）などが含まれている。トゥルタンにはコーランと同じく、発音しやすいように母音記号がつけられてある（注8）。

ここまでのコーラン読誦のための準備学習であり、トゥルタン修了後やっとコーランを読み始めるのであった。アリップ・アリッパン、トゥルタン、コーラン通読という学習順序は、先述の19世紀初めの教育調査で明らかにされたものと変わりはない（注9）。

さて、コーラン読誦教育は発音を重視するため、マンツーマン式で行なわれた。生徒は課題とされた章をひとつ読誦できるようになると、グルの前に進み出て発音をチェックされた。その間他の生徒たちはそれぞれ課題となっている箇所を練習し続けた（注10）。さらに、発音を正確にするためにタジュイッド（tajwid: コーラン読誦術）を学ぶこ

19世紀末のジャワのイスラーム教育とプサントレン

ともあった（注11）。

コーランは全部で114章（6239節、約7万8000語）からなる大部の啓典であるため、通読するにはかなりの時間を要するが、個人差も大きかったようである。コーラン読誦教育は6、7歳頃から始まり、ふつうトゥルタン修了までに1～2年、コーラン通読に1～3年かかった（注12）。あしかけ2～5年を必要としたわけであるが、特別な環境では1年たらずですべてを終えることもあった（注13）。しかし、女子の場合は特に敬虔な家庭を除いては8、9歳ぐらいでランガルには通わせなくなるし、男子も通読が完了するとは限らなかった（注14）。

生涯に少なくとも1度はコーランを読むことはイスラーム教徒の義務であると考えられている。この意味で、コーラン読誦教育は宗教義務の実践そのものであった。コーラン読誦教育を受ける間に、子どもは六信五行を教わり、礼拝の習慣を身につけた。ほかにも、集団礼拝の折によく唱和されるプジアン（pujian: 神への称讃）やジクルを練習し、ムスリム社会の一員としての規律を習得した。

肉親の臨終時にスラット・ヤシン（Surat Yasin. コーランの第36章「ヤー・スィーン」）を朗読するなど、ジャワ人の冠婚葬祭ではコーランの一部を読誦することが要求された。ゆえに、親は子どものコーラン学習の進行に大きな期待を寄せ、学習中にはしばしば学習上達を祝す小さなスラムタン（slametan: 平穏無事を祈願する儀式）が行なわれた。

コーランを通読し終えることをハタム（khatam: 修了）と言い、これに達するとハタマン（khataman）と呼ばれるスラムタンが盛大に行なわれた。この席ではグルはハタムした弟子の能力を試験するために、コーランの第93章「朝」を朗読させた。これが済むと、列席者は彼が条件を満たしたことに

同意し、グルの先導でタヒリル(tahiril)/ドンゴ・ハタム(dongo khatam)(修了の折り)が唱和された(注15)。ハタムに達した男児にすぐ割札を施し、ハタマンと割札の祝賀を同時に行なうこともしばしばあった(注16)。このふたつの儀式は、その男児を成人したイスラーム教徒として承認する意味があった。割札のあとは、礼拝、断食などの義務を励行することが期待されたのである。

このように、コーラン読誦教育は、一般信徒にイスラーム教のミニマムの宗教的儀礼を教えることを目的としていた。コーラン読誦教育は基本的には「読み」に重点が置かれており、すべてはアラビア語を素読するという性格のものであった。そこではアラビア語の文法も教授されず、ジャワ語による解釈も行なわれなかった。したがって、何年もアラビア語を学んだサントリでも、注釈本を参考にしてやっといくらかコーランの内容が理解できるという程度のものであった(注17)。しかし、コーランのなかでよく繰り返される章句はサントリの日常語になるほど慣れ親しまれてもいた(注18)。

(注1) マディウン州とクディリ州のグルはすべてがコーランから教えると証言している。しかし、デマツ県ではコーランを教材に挙げないグルは3分の2以上もいた。これは、デマツ県ではコーランを教える場とキターブを教える場がより明確に分かれていたことを意味するかもしれないが、グル自身はコーランを教えず、学習の進んだサントリにそれを委ねていた可能性もある。スヌックはプサントレンでは副次的にコーラン読誦教育が行なわれていることを記しており(Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 159ページ), また、レッケルケルケルは、プサントレンには予備学習の場としてランガルが併設されていることを記している(Lekkerkerker, 前掲論文, 503ページ)。いずれにしろ、プサントレンとコーラン読誦教育は切り離せない。

(注2) Snouck, 同上書, 157ページ。

(注3) メッカとの交通が容易になった19世紀末に

は、メッカから本を取り寄せることも困難ではなかった。それ以前は注文した本の入手に10数年もの年月を要したが、この時代には、わずか数カ月で可能であった。同上書 102ページ。

(注4) Berg, 前掲論文, 526ページ。『グル登録簿』によると、コーランの印刷本は1.5~3ギルダーで、手書本はその5倍以上の値段であった。また、レッケルケルケルによると、シンガポールからジャワに輸入されたコーランはトーマス・トラステイ(Thomas Trusty)社印刷のもので、値段は1.25~1.50ギルダーであった。Lekkerkerker, C., “De Langgar,” *Het Onderwijs*, 第8巻第8号, 1899年, 91ページ。

(注5) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 160ページ。

(注6) Lekkerkerker, “De Langgar,” 91ページ。

(注7) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 160~161ページ。

(注8) レッケルケルケルはこの母音記号はスンジャタ(senjata=武器)と呼ばれていたと述べている。Lekkerkerker, “De Langgar,” 92ページ。しかし、これはジャワではサンダンガン(sandangan=依服)と呼ばれるのがふつうであった。Pigeaud, Th., *Javaans-Nederlands Woorden Boek*, ハーグ, Martinus Nijhoff, 1982年, 508ページ。Zamakhsyari, 前掲書, 29ページ。

(注9) Chijs, 前掲論文, 215, 232ページ。

(注10) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 161ページ。

(注11) Achmad Djajadiningrat, “Het Leven in een Pesantren,” *Tijdschrift voor Binnenlandsch Bestuur*, 第34巻, 1908年, 17~18ページ。

(注12) Lekkerkerker, “De Langgar,” 91ページ/Veth, P. J., *Java*, 第4巻, ハールレム, Bohn, 1907年, 436ページ/Kartawijaya 著, Lindenborn 編, “Langgar en Pesantrens,” *Mededeelingen van wege het Nederlandsche Zendelinggenootschap*, 第61号, 1917年, 120ページ。

(注13) アフマッド・ジャヤディニングラットはバンタム州スラン(Serang)県のブパティ(bupati: 県知事)の息子で、厳しいコーラン読誦教育を受けた。トゥルトンに3カ月を要したが、その後グル・ンガジの叔父の許に預けられて特訓を受け、1カ月でコーランを通読した。Achmad Djajadiningrat, *Herinneringen*, アムステルダム, Kolff, 1936年, 15~16ペ

ージ。

(注14) Lekkerkerker, “De Langgar,” 92ページ/Veth, *Java*, 435~436ページ。

(注15) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 163~165ページ。ハタマンについては次の体験記に詳しく書かれてある。Djajadiningrat, 前掲書, 19~20ページ。ムハマッド・ラジャブ著 加藤剛訳『スマトラの村の思い出』東京 めこん 1983年 118~128ページ (Muhamad Radjab, *Semasa Kecil di Kampung, 1913-1928*)。これらによると, 必ずしもスヌックの記したように祝賀が行なわれてはいない。しかし, 祝賀の席で, ハタムした子どもがその腕前を披露して列席者を納得させる形式は同じである。

(注16) Snouck, 同上書, 165ページ/Lekkerkerker, “De Langgar,” 92ページ/Kartawijaya, 前掲論文, 120ページ。

(注17) Snouck, 同上書, 159ページ。

(注18) 同上書 162ページ。

### III キターブ教育

キターブ教育はイスラーム的価値規準からみて意義のある知識の習得という点ではコーラン読誦教育の延長である。しかし, 教材に使用されるキターブの多様性においても, 教授法においても, コーラン読誦教育とは著しく異なった。また, 単にコーラン読誦教育を修了しただけでは, キターブ教育に進むには十分ではなかった。

『グル登録簿』には, 「(新しく) 入って来た生徒のなかにはすでにコーランを読める者も多いが, まだ書くことができないので, アリップ・アリッパンから教える」という証言が見られる。キターブ教育では, サントリはペゴン (pegon: アラビア文字を用いたジャワ語表記) 文字を用いてキターブ解釈のメモを取らねばならず, アラビア文字が自在に書けなければキターブの講義には参加できなかった。また, キターブは高価で, 購入できないサ

19世紀末のジャワのイスラーム教育とプサントレン

ントリはキターブを書写しなければならなかった。すでに述べたとおり, コーラン読誦教育は「読み」に重点が置かれていたため, 書く訓練をやり直す必要のあるサントリも多かったのである。したがって, キターブ教育ではアラビア文字を書くという技能を必ず習得するという点でも, コーラン読誦教育とは一段差があった(注1)。

さて, キターブはイスラーム諸学の分野別に書かれており, その分野を列挙すると次のとおりである。フィクフ, ウスール・ル・フィクフ (uṣūl al-fiqh: イスラーム法源論), アフラク (akhlak: 道徳), タウヒード/ウスールディン (uṣūl al-dīn)/カラム (kalām: イスラーム神学), ハディース (ḥadīth: 預言者の伝承), タフシール (tafsīr: コーラン注釈学), タジュウィッド, タサウフ, ナフウ (nahwu: アラビア語統語論), サルフ (sarf: アラビア語語形論), バラガー (balagah: アラビア語修辞学)。このなかでも中心となるのは法学とハディース学である。神学は他宗教におけるほど重要な位置を占めてはいない。

ひとりのグルが教えられるキターブには限りがあり, 多くのキターブを学ぶためにサントリはプサントレンからプサントレンへとキターブ研鑽の旅をし, さらに機会を求めてメッカまで行く者もあった。

それでは, 『グル登録簿』に題名が見い出されるキターブを検討してみよう。第3表に掲げたように, イスラーム法学のキターブ13冊, イスラーム神学6冊, アラビア語文法関係6冊, イスラーム神秘主義学2冊, コーラン注釈学1冊の計28冊が確認できた。この他にも確認できなかったキターブが数冊あったが, 使用度の高いキターブとは考えられず, 省いても全体の傾向を把握するうえでは大差はないと思われる(注2)。

第3表 『グル登録簿』に記されたキターブ

ア) ジャワ語慣用名(『グル登録簿』に出てくる題名) イ) アラビア語題名 ウ) 著者名 エ) 他のキターブとの関係  
使用度(そのキターブ名を挙げたグルの割合) ——◎きわめて多い。○比較的多い。△少ない。無記号は非常に少ない

〔イスラーム法学〕

- 1) ア) *Sapinah*  
◎イ) *Safinat an-Najah*  
ウ) Salim bin Abdullah b. Sumayr (1854年没)
- 2) ア) *Sollam*  
△イ) *Sullam At-Taufiq*  
ウ) Sayid Abdallah b. Al Husayn b. Tahir (1855年没)
- 3) ア) *Sittin*  
◎イ) *Masail as-Sittin*  
ウ) Abu'l Abbas Ahmad b. Muhammad az-Zahid al Misri (1415年没)
- 4) ア) *Minhajulkawin*  
△イ) *Minhaj al Qawim*  
ウ) Syihabuddin Ahmad b. Muhammad b. Hajir al Haitami (1465年没)  
エ) (*Mukhtasar* [6] *Mukhtasar* とは別物) の論評
- 5) ア) *Kurdi*  
イ) *Al Hawasyi al Madaniyah*  
ウ) Sulaiman al Kurdi (1780年没)  
エ) 4) *Minhajulkawin* の論評
- 6) ア) *Takrib/Tekorub*  
△イ) *Mukhtasar*  
ウ) Qadi Abu Syodya (1203年没)
- 7) ア) *Pathulkorib*  
◎イ) *Fath al Qarib*  
ウ) Abu Abdallah Muhammad b. Qasim al Ghazzi (1512年没)  
エ) 6) *Takrib* の論評
- 8) ア) *Bajuri*  
イ) アラビア語の題名なし  
ウ) Ibrahim b. Muhammad al Bajuri (1844年没)  
エ) 7) *Pathulkorib* の論評
- 9) ア) *Bojerimi*  
イ) *Tuhfat al Habib*  
ウ) Sulayman al Bujairimi (1785年没)  
エ) (*Al Igna* [7] *Pathulkorib* の論評) の注解)
- 10) ア) *Mukorar*  
△イ) *Al Muharrar*  
ウ) Abu'l Qasim Abdul Karim b. Muhammad Ar Rafi'i (1226年没)
- 11) ア) *Pathulwahab*  
イ) *Fath-al-wahab*  
ウ) Abu Yahya Zakarya b. Muhammad al Ansary (1520年没)  
エ) (*Minhaj at Talibin* [10] *Mukorar* の論評) の論評
- 12) ア) *Tuhpat*  
イ) *Tuhfat al Muhtaj*  
ウ) B. Hajr al Haitami (1465年没)  
エ) (*Minhaj at Talibin* [10] *Mukorar* の論評) の論評
- 13) ア) *Pathulmugin*  
○イ) *Fath al Mu' in*  
ウ) Zainuddin b. Abdul Aziz al Malabari (1574年没)  
エ) (*Qurratul' Ain Binmaatid Diin* の論評)

〔イスラーム神学〕

- 14) ア) *Semorokondi/Asmorokondi*  
◎イ) アラビア語の題名なし  
ウ) Abu'l Laith Muhammad b. Abu Nasr b. Ibrahim as-Samarqandi
- 15) ア) *Sanusi*  
○イ) *Umm al Barahin/ad Dorrah/Aqidat as-Sinusi/al Aga'id al Sughra*  
ウ) Abu Abdallah Muhammad b. Yusuf as Sinusi al Hasani (1490年没)
- 16) ア) *Talmisani*  
○イ) アラビア語の題名なし  
ウ) Abdallah Muhammad b. Umar b. Ibrahim at-Telemsani  
エ) 15) *Sanusi* の論評
- 17) ア) *Mopid*  
○イ) *Al Mufid*  
ウ) Abu Abdallah Muhammad b. Sulaiman al Juzuli (1465年没)
- 18) ア) *Pathulmubin*  
○イ) *Fath al Mubin*  
ウ) Ibrahim b. Muhammad al Bajuri (1840年没)  
エ) 17) *Mopid* の論評
- 19) ア) *Miftah*  
○イ) *Al Miftah fi syarh ma' rifat al Islam*  
ウ) Muhammad b. asy-Syafi'i al Fadhalai

〔アラビア語文法〕

- 20) ア) *Jurumiah*  
△イ) *Muqaddamat al Ajrumiah*  
ウ) Abu Abdallah b. Muhammad b. Daud As-Sanhaji b. Ajurrum (1323年没)
- 21) ア) *Motamminah*  
イ) *Mutamminah*  
ウ) Syamsuddin Muhammad b. Muhammad ar-Ru'aini  
エ) 20) *Jurumiah* の論評
- 22) ア) *Imiriti*  
イ) *Ad Durrat al bahiyah*  
ウ) Syaraf b. Yahya b. Abu'l Khayr al Ansaari al Imiriti (1563年没)  
エ) 20) *Jurumiah* の論評
- 23) ア) *Kaprawi*  
イ) アラビア語の題名なし  
ウ) Hasan al Kafrawi (1785年没)  
エ) 20) *Jurumiah* の論評
- 24) ア) *Jurjani/Amil*  
△イ) *Al Awamil al-Miah*  
ウ) Abdul Qahir b. Abdur Rahman al Jurjani (1078年没)
- 25) ア) *Maksud*  
イ) *Al Maqsd fi's-sarf*  
ウ) 著者名不詳

〔イスラーム神秘主義学〕

- 26) ア) *Minhajulabidin*  
イ) *Minhaj al Abidin*  
ウ) Abu Hamid Muhammad al Ghazali (1111年没)
- 27) ア) *Sarkawi/Hikam*

- イ) *Al Hikam*  
ウ) Abdullah b. al Hijazi al Khaluti as-Syar-qawi

## 〔コーラン注釈学〕

- 28) ア) *Jalalain*  
△イ) *Tafsir Jalalain*  
ウ) Jalaluddin Muhammad b. Ahmad al Mahalli(1460年没)とJalaluddin Abdurrahman b. Abu Bakr as Suyuti (1505年没)

(出所) オランダの王立言語・地理・民俗研究所所蔵資料 H 1085-89, H 1085-90, および、レイデン大学図書館東洋手書室所蔵資料7710。

(注) \* 各キターブが今回検討したグル286人のなか

すでに述べたように、ペルフは、当時のプサントレンで使用されていたキターブ49冊を列挙している(注3)。これに比べると、『グル登録簿』に記載されたキターブはその約半数にすぎない。しかし、これは面接時点で列挙されたキターブであり、その他にもまだ多くのキターブをグルが所蔵しているという注記もあるので、数の少なさはあまり問題ではない。むしろ、使用頻度の高いキターブ名が挙げられたと理解すべきであろう。

第3表に示したキターブのリストからは次のような特徴が見い出される。

ここに挙げられたキターブのほとんどは、中世の中東のウラマー(‘ulama’: イスラーム教の学者、知識人)によって書かれたものである。『グル登録簿』にはハジの称号を持つグルが多く、そのなかにはメッカで学んだと証言する者も少なくない(注4)。しかし、19世紀後半にメッカで活躍したナワウィ(Nawawi)(注5)などインドネシア出身のウラマー自身による著作はまだ見当たらない。そのようなキターブが一般的に使用されるようになるにはまだ時間がかかったようである。その一方、移住アラブ人の影響はより色濃くあらわれている。法学の1)『サフィナー』と2)『ソラム』は19世紀にハドドラマウト出身のウラマーによって書かれたキターブである。なかでも使用頻度の高か

の実際何人によって使用されているのかを数字で示すには次のふたつの難点がある。まず、上級のキターブを専門に教えるグルのなかには、初級程度のキターブを挙げない場合が多く、数字で示すとこのようなキターブの使用度は低く見積られてしまう恐れがある。また、『グル登録簿』の記載そのものにも若干問題がある。たとえば、マディウン州のある郡では、グル20人余りの質問3)~7)に対する解答がすべて同じに記されているが、全員が全く同じ答をしたとは考えにくい。これに類した記載はほかにも見られた。ゆえに、ここでは具体的な数字をあげることを避け、だいたいの目安で示した。

った『サフィナー』を書いたサリーム・ビン・スマイルは、彼自身も19世紀中頃バタヴィアに移住し、そこで生涯を終えている(注6)。

分野別に見ると、法学が他を引き離している。これは単にキターブの数だけでなく、使用頻度の高さからも明らかである。また、神学のキターブもいずれもよく使用されていた。キターブを教えるグルはすべて、法学と神学のいずれか、あるいはその両方ともを教えているが、他の分野のキターブは付随的に教えられたようである。この時期のプサントレンでは法学と神学が教育の主要科目であったと言えるが、これはスヌックの指摘とも一致する。法学と神学は、ジャワ語ではそれぞれペキッ(pekih), ウスール(usul)という慣用的名称ですでに定着していた。

ジャワのイスラーム化はタレカットの布教活動に負うところが大きかったことはすでに述べた。しかし、神秘主義のキターブは26)『ミンハジュルアビディン』と27)『サルカウィ』が挙げられているのみで、それもさして使用されていなかった。ペルフやスヌックが明らかにしたとおり、プサントレン教育において神秘主義の占める比重は非常に小さくなっており、イスラーム法優位の傾向は歴然としている。また、上述のサリーム・ビン・スマイルはタレカットに対する厳しい批判者

であったことも知られており<sup>(注7)</sup>、このようなウラマーのキターブが比較的短期間に普及したこともこの傾向を裏づけている<sup>(注8)</sup>。以上のことを考え合わせると、同時代のオランダの文献にまだ見出しされる黒魔術<sup>(注9)</sup>、ジャワ神秘主義のキターブ<sup>(注10)</sup>、ジャワ・アニミズムと融合したイスラーム神秘主義<sup>(注11)</sup>が、キターブ学習を根幹とするプサントレン教育のなかで重要な位置を占めていたとは考えがたい。

法学のキターブはほとんどの場合、シャラー(syarah: 論評・解説)という形態をとり、マトン(matn: 原典)であるものは少ない。たとえば、7)『ファトフルカリブ』と13)『ファトフルムイン』はともによく使用されたキターブであるが、両書ともシャラーである。しかも、『ファトフルカリブ』はそのマトンである6)『タクリブ』よりもよく使用され、『ファトフルムイン』のマトンにあたるキターブはインドネシアでは見出しされなかった<sup>(注12)</sup>。もっとも、印刷本であれば、シャラーのキターブにはそのマトンにあたるキターブも印刷されてあるので、同時に学ぶことは可能である。また、論評・解説はその著者自身の意見という形ではなされていない。それはいつも、「ガザーリー(Al-Ghazaliy)<sup>(注13)</sup>の意見では……」、「ナワウィ(An-Nawawi)<sup>(注14)</sup>によると……」とか、「ブハーリー(Al-Bukhariy)<sup>(注15)</sup>のハディースのなかには……」というように、権威あるウラマーの見解を引用したり、根拠にした形でなされている<sup>(注16)</sup>。独創的であるよりも、歴代のウラマーの法解釈を重視するマズハブ(madzhab: 正統四法学派)の特徴がよくあらわれている。

法学のキターブはすべて、マズハブのなかでも東南アジア一円で支配的なシャーフィイー(Shāfi'i)派のものである。シャーフィイー派は法学の

基礎をコーラン、スンナ(sunna: 慣行、具体的にはハディースに示された預言者の範例)、イジュマウ('ijmā': ウラマーたちの合意)、キヤース(qiyās: 類推)と定めている。しかし、『グル登録簿』に記されたキターブのなかでコーランの内容を探索する手掛りとなるコーラン注釈書は28)『ジャラライン』ただひとつであり、ハディースに関するキターブを使用するグルもほとんど皆無であった<sup>(注17)</sup>。また、イスラーム法の諸原理、法解釈の方法論を学ぶイスラーム法源論のキターブもひとつも見当らなかった。重要な法源であるコーランやハディースの内容理解は法学のキターブを通してなされる程度のものであった可能性が大きい。

それでは、プサントレンの教育のなかで最も大きな位置を占める法学では何が学ばれたのか、法学のキターブの内容を見てみたい。

まず、1)『サフィナー』と3)『シッティン』は、神学の14)『スモロコンディ』とともに、六信五行についての基本的知識を教えるためにきわめて一般的に用いられていた<sup>(注18)</sup>。特に『シッティン』はしばしば『シッティン・ウスूल』(Sittin Usul)と表記されており、法学とも神学とも区別されず、キターブ教育においてはもっともポピュラーなキターブであったようである。この3書と『ソラム』はキターブ教育では最初に教えられる初級者用のキターブであった。

1)~5)のキターブは特にイバーダート('ibādāt: 宗教義務、神への奉仕)を中心に書かれてあり、タハーラ(tahārah: 清浄)、ウドゥー(wuḍū: 礼拝前の清め)、礼拝、断食、ザカート(zakāt: 喜捨)、巡礼について解説されている。6)~13)のキターブは、イバーダートに加え、より広い範囲に適用されるムアーマラート(mu'āmalāt: 行動規範、信者同士の人間関係)についても記されている。ムアーマラート

は、売買、契約、寄進、所有、相続、婚姻、裁判、刑罰等、社会生活で起こりうるあらゆる法的な問題を含む<sup>(注19)</sup>。

当時のジャワのイスラーム法学教育のスタンダードとも言えるのは、前述の『ファトフルカリブ』と『ファトフルムイン』である。両者とも前半はイバダートについて、後半はムアマラートについて書かれている。内容から見ると、『ファトフルカリブ』は初・中級者向けで、『ファトフルムイン』はそれを終えたやや上級者向けの教科書と言えよう。たとえば、礼拝に関して、『ファトフルカリブ』では礼拝をするための条件(時間、場所等)、仕方について一通りの心得ともいえるような説明がなされているにとどまる。これに比べ、『ファトフルムイン』では、礼拝の一挙手一投足、間合いのとり方およびその意図されることまでが克明に記され、さらにアザーン(adhān: 礼拝への呼び掛け)やイクォーマ(iqōma: 礼拝所にイマーム[imām: 導師]が登場したことを告げる合図)についても述べられている。明らかに礼拝を導く立場の者に必要な知識までも与えることを目的として書かれている。ムアマラートの部分も、『ファトフルカリブ』は単に生活を倫理的に規制する程度の知識を与えるにすぎない。ところが『ファトフルムイン』ではかなり専門的で、多くの事態に対処するための判断規準が詳しく示されている<sup>(注20)</sup>。

要するに、サントリは法学のキターブから、イスラーム教徒として為すべきこと、信仰の実践についての知識を修得し、それを基調とした生活をめざすことなどを学んだのである。

さて、『グル登録簿』から見る限り、この時代のキターブ教育にはプログラムというのは無きに等しかったと言ってよい。特に、アラビア語の原書を読むためには、アラビア語文法の知識を多少

とも修得することが先決と考えられるが、グルがそのように意図的に教えたかはかなり疑問である。だいいち、マディウン州ではアラビア語文法関係のキターブ名を挙げたグルはきわめてまれで、奇異な感じさえ受けるほどである。デマッ県では5人に1人の割合でアラビア語文法を教えるグルがいたが、それも初級程度のキターブを教えたのちであった。アラビア語文法教育の不足はオランダ人観察者に指摘されただけでなく<sup>(注21)</sup>、プサントレン教育体験者からも次のように批判されている。「ジャワでナフウをマスターした者はキヤイを自称してもよい」<sup>(注22)</sup>。これはややオーバーな表現かも知れないが、アラビア語の基礎知識の欠落がサントリたちにとって、キターブ学習における障害となっていたことは明らかである。

キターブ教育に秩序だったカリキュラムがないのは、プサントレン教育の特色そのものでもあった。元来、プサントレンには固定した時間制や学級制もなく、講義への出欠も自由であった。『グル登録簿』では、「それぞれの生徒の希望どおりに教える」ことを旨としたグルも多い。つまり、学習のプログラムはサントリ自身に任されていたのである。『グル登録簿』の多くのグルが3、4校のプサントレンで学んでいるのからもわかるとおり、サントリはひとつのプサントレンに定着するのではなく、複数のプサントレンで学業を積むのがふつうであった。どのグルの許でどのキターブを学ぶのか、サントリはあらかじめある程度の心積りを持ってプサントレンの門を叩いたのであろう。

最後に、キターブ教育に独特な教授法について述べておきたい。これには二とおりあるが、ひとつはソロガン(sorogan: 鍵)と呼ばれた。これは初級用のキターブを教授する時に用いられた方法



である。グルがサントリを一对一で教え、質問と応答を主とする徹底した個人指導を行なった。もうひとつはバンドンガン(bandungan: 一緒に、同時に)、もしくはウエトン(weton: 時間制の)と呼ばれる集団講義で、中級以上のキターブの講義に用いられた。これはグルがキターブを読み、それを翻訳し、注釈を加えるものであった。教える側が一方的に話す性格の教授法で、講義中サントリは黙って聞くだけであった。講義のあと質問はできるが、ディスカッションはなかった。グルが繰り返し言ったことを覚えるのがサントリの学習法であった(注23)。このふたつの教授法は現代のプサントレンでも変わらず用いられている。

コーラン読誦教育が義務教育に近いようなもので、フォームも定まっていたのに対し、キターブ教育はかなりインフォーマルな形態をとっていた。特に、上級レベルのキターブ教育は、布教の中核となる少数の宗教エリートを養成するためのものであり、そこで学ぶサントリは宗教の専門家たれんとする意志を持っていた(注24)。

スヌック以前のオランダの文献には、プサントレンを指す言葉としてよく“priesterschool”(僧侶学校)が代用されていた。イスラーム教には厳密な意味での聖職者層は存在しないので、このような名称を用いるのは正しくない。しかし、実際の社会生活においては、イスラーム学の知識を積んだ者はウラマーとして非常に尊敬され、住民の精神的指導者となりえた。彼らのなかには宗務官吏や宗教教師になる者も多かった。プサントレンで学んだ優秀なサントリは、植民地政府の学校で教育を受けたブリヤイよりも社会的prestigeは上であった(注25)。

(注1) コーランと比較すると、キターブはかなり割高であった。『グル登録簿』によると、印刷本のキ

ターブの値段は、小さいものなら0.5ギルダー程度であったが、大部のものは10ギルダーを超えた。手書本はその3倍以上であった。商港に近いデマツ県は割安で、商港から離れたマディウン州の南岸地域と比べると、同じキターブでも数分の1の値段であった。アラビア文字を書くことはひとつの技能であり、キターブの書写を生計の一手段にするサントリもいた。Lekkerkerker, “De Pesantren,” 507ページ。手書本には、行間にペゴン文字でジャワ語の説明がついていたが、これは講義中にサントリがメモしたことまで書写されたためである。

(注2) キターブ名と著者名の確認のために次のものを参照にした。Berg, 前掲論文, 524~555ページ/Bruinessen, Martinvan, “Provisional Handlist of Kitab Kuning Collected in Indonesia and Malaysia for the KITLV Library,” ミメオグラフ, 1987年。リストに記した28冊のうち、ベルフの論文に見い出せなかったのは、25)『マクスッド』のみであった。これを除いたキターブのアラビア語の題名と著者名の表記法は次のものに従った。Steenbrink, 前掲書, 155~157ページ。各著者の没年に関してはベルフを参照し、また、各キターブの内容についてはベルフの他にも次のものを参照した。Snouck, *Padangsche Bovenlanden*/同, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 104~106ページ/Sudjoko Prasodjo 他編, *Profil Pesantren*, [プサントレンの横顔], 第3版, ジャカルタ, LP3 ES, 1982年, 209~220ページ/Zaini Ahmad Syis 編, *Standarisasi Pengajaran Agama di Pondok Pesantren*[ポンドック・プサントレンの宗教学習の標準化], ジャカルタ, Departemen Agama R. I., 1983年, 37~74ページ。さらに、7)『ファトフルカリブ』と13)『ファトフルムイン』に関してはインドネシア語版を参照にした。Ghazzi, Qasim 著, Imron Abu Amar 訳, *Fat-hul Qarib*, ジャカルタ, Menara Kudus, 1984年/Malibari, Zainuddin 著, Aliy Asa 訳, *Fat-hul Mu'in*, ジャカルタ, Menara Kudus, 1980年。

(注3) 49冊の内訳は、法学18冊、アラビア語文法15冊、神学9冊、コーラン注釈学1冊、そして、すでに述べたように、神秘主義学6冊である。Berg, 前掲論文, 524~555ページ。

(注4) ハジの称号を持つグルは、マディウン州が185人中の19人、デマツ県が95人中の44人、クディリ州が6人中2人である。単純な比較はできないが、1888

年のジャワの全人口に対するハジの数が0.2%前後(Steenbrink, 前掲書, 253ページ)であることを考えると、かなり多いと言えるであろう。なお、そのなかでもメッカで修業したと証言したグルは、それぞれ4人、5人、2人である。

(注5) バンタム州出身のイスラーム法学者。ナウィについては次を参照。Snouck, *Mekka*, 268~272, 278ページ/Zamakhsyari, 前掲書, 87~89ページ。

(注6) Berg, 前掲論文, 527ページ/Steenbrink, 前掲書, 133ページ。

(注7) Berg, 同上論文, 527ページ。また、サリーム・ビン・スマイルがタレカットに反対して書いた本はムラユ語に翻訳されて広く読まれた。Steenbrink, 同上書, 175ページ。

(注8) ただし、『サビナー』は時にデマッ県で多く使用されており、マディウン州ではまだわずかしが使われていなかった。これは、このキターブが北海岸のアラブ人社会を通して普及していったことを示唆している。

また、19世紀後半には、タレカットのなかでもイスラーム法を重視する流派が勢力を延ばしてきたことも指摘されている(Steenbrink, 同上書, 174~176ページ)が、まだ十分な実証はなされていない。

(注9) Berg, 前掲論文, 522ページ。

(注10) Kartawidjaja, 前掲論文, 123ページ。

(注11) Lekkerkerker, “De Pesantren,” 509ページ。

(注12) Berg, 前掲論文, 533ページ。

(注13) イスラーム史上で最も名高い思想家のひとり、神学者でもあった。1111年没。日本イスラーム協会『イスラーム事典』平凡社 1982年 138ページ/黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂出版 1983年 339~341ページ。

(注14) イスラーム法学者, 1277年没。11)『ファトフルワハブ』と12)『トウファト』の原典である『ミンハジャタルビン』の著者。前述のガザリーの学派の系譜に連なる。Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 105ページ。

(注15) ハディース学者, 870年没。ブハーリーの編集した伝承集成は、後代の法学者によって重要視された。日本イスラーム協会 前掲書 330ページ/黒田編 前掲書 120~122ページ。

(注16) Ghazzi, 前掲書/Malibari, 前掲書。

(注17) マディウン州に1人だけハディースを教え

## 19世紀末のジャワのイスラーム教育とプサントレン

るグルがいたが、具体的なキターブ名は記されていない。

(注18) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 182~183ページ。

(注19) Berg, 前掲書, 526~533ページ。

(注20) Ghazzi, 前掲書/Malibari, 前掲書。

(注21) Lekkerkerker, “De Pesantren,” 509ページ。

(注22) Djajadiningrat, *Herinneringen*, 23ページ。

(注23) Fokkens, F., “Priesterschool te Tegalsri,” *T. B. G.*, 第24号, 1877年, 335~336ページ/Berg, 前掲論文, 524ページ/Lekkerkerker, “De Pesantren,” 508ページ/Djajadiningrat, 同上書, 21ページ。

(注24) このような上級レベルのキターブを教えるプサントレンで学ぶサントリは、成人男子に限られていた。Berg, 同上論文, 520ページ。

(注25) Snouck, *Verspreide Geschriften*, 第4巻第1号, 180ページ。

## おわりに

以上見たように、19世紀末、プサントレンを中心とするイスラーム教育は、ジャワでかなりの広がりを見せていた。プサントレンは、中東世界からのたえざるインセンティブを受け、イスラーム教の教育機関として、また、イスラーム教布教の拠点のひとつとして機能していた。

初等教育のコーラン読誦教育は、中東のクッターブ(kuttāb: コーラン塾)<sup>(注1)</sup>の教育のあり方ときわめて類似しており、しかもジャワ人の生活習慣のなかにすでに深く根をおろしていた。コーラン読誦教育の方法、内容は19世紀を通して変化はなかったが、キターブ教育にはひとつの大きな変化が起きていた。

ジャワのイスラーム化当初より優勢であった宗教体験を重んじる神秘主義志向は後退し、純然た

る宗教知識の修得が主体となり、なかでもイスラーム法学がキターブ教育の最重要科目としての位置を占めるようになっていた。使用されたキターブから見る限り、当時のイスラーム法学教育の内容・レベルは現在のものと比べてもほとんど遜色はない(注2)。

その反面、キターブ教育の基礎となるアラビア語文法、ならびにイスラーム法解釈に欠かせないイスラーム法源論、コーラン注釈学、ハディース学のキターブはかなり不十分にしか、もしくは全く教えられなかった。イスラーム法学関連分野のキターブの欠落は、重要なイスラーム法源の探求を困難にし、イスラーム法解釈において盲目的タクリード(taqlid: 先人の意見にそのまま従うこと)を生む危険を孕んでいた。このようなイスラーム法学のあり方が、のちに「コーランとスンナに帰れ」をスローガンとするムハンマディヤーの攻撃の対象となったのである。

しかしながら、何よりも、イスラーム法重視の傾向が強まったことがジャワのイスラーム「活性化」を引き起こす大きな誘因のひとつとなったのは確かである。イスラーム法とはイスラーム教徒の生活を規制する聖法であり、その知識を修得することは、イスラーム教徒としての自覚を高め、宗教儀礼の励行を促すからである。プサントレンはイスラーム法の知識普及に大きく寄与すると同時に、ムスリム社会をリードするイスラーム法の専門家を養成したのである。

プサントレンは、20世紀初頭に、オランダによる西洋教育の大幅拡大とムハンマディヤーの教育改革運動というふたつの大きなインパクトを受けた。プサントレンが積極的に教育改革の努力を始めたのはこのインパクトによるものであるというのが今までの通説であった。しかし、本稿で明ら

かにしたとおり、それ以前に、プサントレンはひとつの「革新」を成し遂げ、その教育は部分的ではあれ、中東のそれに近づきつつあった。19世紀(特に後半)はプサントレンにとっては決して停滞の時代ではなく、再生への活力を示した時代であった。

さて、自覚化したイスラーム教徒は植民地支配に対していかなる認識を持つようになるのであろうか。1880年代後半にプサントレンで学んだ上級プリアイの子弟は次のような体験を記している。

「私は官吏の子どもとして、政府を好かないルラー(lurah: ポンドック長)(注3)によってかなりの憂き目を見させられた。たとえば、私がアラビア語の単語をまちがって発音しようものなら、彼は即座に憎々しげに私に怒鳴った。『お前は決してそれを習得することはないであろう。お前の腹には不浄な金で買った飯がつまりすぎているからだ!』(政府から受ける給料は、彼の言うところによればハラーム[haram: 禁忌]、つまり不浄であった)。(注4)。

当時のプサントレンに渦巻く反オランダ感情の一端を示すエピソードである。プサントレンには、民族運動を生み出す土壌がすでに形成されていたのである。

イスラーム「活性化」は20世紀に入ると新たな展開を見せた。1910年代イスラームを旗印としたイスラム同盟運動は燎原の火のごとくジャワ各地に広がり、大衆の支持を獲得した。1920年、植民地政府を震憾させたパンテン地方を中心とした「共産党蜂起」も、宗教色の濃いものであり、宗教指導者が大きな役割を果たした(注5)。このような初期の民族主義運動においては、イスラームと民族主義はほとんど同一視されていた。これらの運動の隆盛は、近代的組織の動員力に負うところもあるが、ムスリム社会の「活性化」、一般信徒のイスラーム教徒としての意識の高揚という背景に支えられていたことも見落としてはならない。

(注1) クッターブおよび中東のイスラーム教育については次を参照。日本イスラム協会 前掲書 157～160, 163～164ページ／黒田編 前掲書 237～255ページ／飯森嘉助・石橋重雄「Islamic School の研究」(『研究年報』〔拓殖大学研究所〕第9号 1985年) 1～23ページ。

(注2) 現在のインドネシアのブサントレンの統轄官庁である宗務省が示したイスラーム法学の標準となるキターブには、『グル登録簿』で見い出された次のキターブが挙げられている。

基礎 1) 『サビナー』

中級Ⅰ 6) 『タクリブ』または 7) 『ファトフルカリブ』

4) 『ミンハジュルルカウイン』

中級Ⅱ 13) 『ファトフルムイン』

上級 11) 『ファトフルワハブ』

(出所) Zaini, 前掲書, 69～70ページ。

(注3) キャイの信任を得てボンドックの管理を任されたサントリ。普通は年長者で、下級生のサントリの学習を指導することも多かった。

(注4) Djajadiningrat, *Herinneringen*, 21ページ。

(注5) Williams, Micheal C., *Sickle and Crescent: The Communist Revolt of 1926 in Banten*, イサカ, Cornell University Press, 1982年。

(インドネシア近現代史研究者)